

氏名	林 一 圭
授与した学位	博士
専攻分野の名称	学 術
学位授与番号	博甲第2176号
学位授与の日付	平成13年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	在日韓国人の生活と意識に関する研究 －岡山県内在住の在日韓国人を中心として－
論文審査委員	教授 小林 孝行 教授 多谷 頼典 教授 中藤 康俊 広島国際学院大学現代社会学部教授 山口 素光 大阪市立大学文学部教授 谷 富夫

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

今日在日韓国・朝鮮人を取り巻く日本社会の環境は少しずつ変化しており、そのなかでは在日韓国・朝鮮人社会内部における状況の変化も著しい。本論文は、岡山県内の在日韓国人の生活実態と民族意識を、アンケート調査を行い、その結果をもとに、世代とともに進行する生活の変化と民族意識の変容に焦点をおいて、韓国社会での実態調査とも比較しつつ、今日の在日韓国人問題の解明に迫ろうとするものである。

序章では、まずこの問題についての先行研究を考察し理論的な検討を行った。そこで、H. ガンズのシンボリック・エスニシティ概念と福岡安則の民族的アイデンティティの四分類に注目した。第2章では、調査対象地域である岡山県の在日韓国・朝鮮人社会の歴史と現況について戦前、戦後の日本の統計調査データや戦後の岡山民団資料などの資料に基づいて考察した。第3章では、今回のアンケート調査の概略を叙述した。アンケート調査は、岡山県の在日本韓国民団岡山県本部の「国民登録者名簿」を用い、3, 873人の登録者から調査対象者1, 000人(20歳以上のもの)を無作為に選んだ。調査は郵送法で、期間は1997年4月10日から5月15日の間である。回答者は578人で回答率は57.8%であった。

第4章から第8章まで、調査結果の分析を行っている。

まず、第4章では誕生、成人式、婚礼、葬礼、祭祀(チェサ)などの通過儀礼についての検討を行った。祭祀を除いて、他の通過儀礼ではかなりの世代差が見られた。韓国との比較では、子供に名前をつける際の「行列(ハンヨル)字の使用」、および「ドルジャンチ(誕生1年目の祝い)」などの伝統的儀礼では、日本ではほとんど行われなくなり、反対に、日本の伝統的儀礼である「七五三の祝い」が、在日韓国人には受け入れられていることが明らかになった。祭祀では、「祭祀」そのものの実施では世代差はなく、むしろ本

国の調査に較べて、祭祀そのものは簡略化していても、祭祀を守ろうとする意識が高いことが明らかになった。これは祭祀が在日韓国人にとってエスニック・シンボルとなっていることを示すものである。

第5章では「元旦過ごし」「茶礼」「ユッノリ（韓国伝統の遊び）」など歳時風俗の検討をおこなった。歳時風俗のほとんどの項目で世代差がみられた。韓国の伝統風俗のなかでは、「ユッノリ」が在日韓国人ではほとんど見られなくなっている。反対に日本の伝統行事である「初詣で」や「雛祭り」「鯉のぼり」が、在日韓国人に受容されていることが明らかにされた。第6章では、衣食住について検討した。オンドルなどの住習慣については、日本ではほとんど見られないが、食習慣のなかでもキムチを食べることは、世代差がみられるものの、日本でもかなり多く維持されていることが明らかになった。第7章では、家族関係について検討した。養子、親子同居、親の世話、財産相続などに関してはかなりの世代差が見られ、韓国との差も大きい。第8章では民族意識について、ここではその背景ともいえる言葉、名前、民族教育、民族団体への参加、同胞との交流、帰化、民族としての誇りなどの項目を検討した。ほとんどの項目では世代差が見られた。

第9章では、「本国に対する愛着度」と「日本への帰化願望」の二つの問に対する回答から、在日韓国・朝鮮人の民族的アイデンティティを「伝統志向」「帰化志向」「両属志向」「個人志向」の四つのタイプに分けて、通過儀礼、歳時風俗などの質問項目とクロス分析を行った。このなかで、「伝統志向」と「帰化志向」はサンプル数も多く、クロス分析においてもハッキリとした特徴を示した。

「伝統志向」タイプは「本国に対する愛着度」だけに肯定的回答をしたもので、その特徴は、通過儀礼に関連しては「同胞同士の結婚」などを望み、歳時風俗、衣食住、家族関係などでは本国の伝統をまもる傾向が強い。民族団体への参加、同胞との友人関係、韓国語会話能力、家庭での母国語使用、民族教育の学習経験、本国に対する愛着度などについて、肯定的受容という反応を示し、通名の使用、在日としての劣等意識、帰化願望などについては否定的受容を示している。「帰化志向」タイプは「日本への帰化願望」だけに肯定的回答をしたもので、その特徴は、「伝統志向」タイプでは肯定的受容を示した通過儀礼、歳時風俗、衣食住、家族関係などの項目について、いずれも否定的受容を示している。

「両属志向」は「本国に対する愛着度」と「日本への帰化願望」の二つの問の両方に肯定的回答をしたものであり、「個人志向」はその両方の間に否定的回答をしたものである。

「両属志向」「個人志向」についてはサンプル数も少なく、クロス分析においても明確な特徴を示してはいないが、2・3世に見られる傾向がある。いずれにしても「両属志向」

「個人志向」というタイプは「伝統志向」や「帰化志向」とは異なるアイデンティティタイプであることは明確となった。ここでは福岡の民族的アイデンティティの分類方法と対比しながら検討し、新たなアイデンティティタイプを考えながら、福岡の分類法における問題点を指摘した。

次に、在日韓国・朝鮮人の民族的アイデンティティを構成する上で、H. ガンズのシンボリック・エスニシティ概念を参照しながら、いくつかのエスニック・シンボルを検討した。今回の調査のなかで、「民族としての誇りを持って生きるのに大事なものはなにか」という質問に対する回答として、1世は「言葉」をあげたものが最も多く、ついで「国籍」「歴史」「血統」「文化」「祭祀」をあげ、2世は「言葉」をあげたものが最も多く、ついで「歴史」「国籍」をあげ、3世は「歴史」をあげたものが最も多く、ついで「言葉」「国籍」などをあげている。ここではエスニック・シンボルとの関連で「祭日、祭り、儀式」「結婚」「歴史」「言葉」「名前」などについて検討した。

「祭日、祭り、儀式」では、特に祭祀（チェサ）が世代を通してかなり守られていることが検証され、エスニック・シンボルとしてのチェサの重要性が明かとなった。「結婚」では、3世では同胞の結婚相手を見つけるのが困難になっており、「韓国伝統の婚礼を守りたい」という質問項目についても消極的な回答が多かったが、在日韓国人3世の同胞同士の結婚披露宴を観察したところ、披露宴の時にはチャンゴ（韓国の伝統的な太鼓）の演奏が行われ、このような婚礼の儀式もエスニック・シンボルとなっていることがうかがえた。「歴史」では、エスニック集団は、同じ歴史認識をもつことが重要である。在日韓国人のなかでは、特に若い世代において、歴史がエスニック・シンボルとして働くようである。これまであまり知られていなかった自民族の歴史を学ぶことによって、民族的アイデンティティを確立するといえるのではないか。

「言葉」では在日韓国人の2・3世のなかには、韓国語がわからない人が多いが、いくつかの単語は知っているという人も多い。また、「母国語」単語を使用する場合には日本語と混ぜて話すので、同胞同士でしか通じない。そのことはエスニック集団としての一体感、充実感を示すことになり、「ウリナラ（我が国）」「アボジ（父）」あるいは「アッパ（父）」「オモニ（母）」「オンマ（母）」などの母国語単語がエスニックシンボルとして意味をもつのである。「名前」は民族的アイデンティティのあらゆるシンボルの中で、もっとも根本的なものであり、もっとも明白なものである。ほとんどの在日韓国・朝鮮人は歴史的な背景もあり、本名（民族名）だけではなく、通名（日本名）をもっている。そのようななかで、本名の使用は自らの民族性を明らかにすることになり、エスニック・シンボルとなる。

これまでの検討から、在日韓国人のなかでは「伝統志向」タイプや「帰化志向」とは異なる新たな「両属志向」「個人志向」タイプの存在が確認され、それらはいくつかのエスニックシンボルと関わって形成、維持されていることが明らかとなった。

終わりに、本調査研究はアンケート対象を岡山県内の在日韓国人としたので、この研究結果をすぐに在日韓国・朝鮮人全体に一般化することは難しい。これから、日本において各地の在日韓国・朝鮮人社会の生活実態と民族意識との比較研究をすることによって、在日韓国・朝鮮人研究をいっそう深めていく必要がある。また、在日韓国・朝鮮人に対する

日本人の意識や態度などを調査研究することを通して、この問題に対してより多元的な検討が求められる。

論文審査結果の要旨

学位論文審査会は2001年1月23日、学内審査委員3名と、招聘審査委員2名によって行った。審査結果は以下の通りである。

本論文は、岡山県の在日韓国人を対象としたアンケート調査によって、その生活実態と民族意識を明らかとするとともに、韓国社会における実態調査とも比較して、特に世代による生活習慣の変化と民族意識の変容に焦点をあてて、分析したものである。

近年になって、在日韓国・朝鮮人に関する調査研究は少しずつ増えてきているとはいえ、まだまだ多いとはいえない状況である。また、このような種類の調査は実施はなかなか困難となっている状況である。

本論文の調査研究は、岡山県の在日韓国人を対象としたはじめての本格的調査研究である。この調査は岡山民団を母集団として社会学的調査手法に基づいたものであり、その意義は大きい。そしてこの調査結果は日本の他地域の調査に対しても、準拠枠を示すものとなりうるものと考えられ、極めて意味ある貴重なものであると評価される。

また、韓国の伝統的な通過儀礼や習慣について、本国である韓国社会との比較を行っているが、これまでの調査研究ではほとんど行われてこなかったものである。この調査は韓国の伝統的な風俗習慣について、詳しい知識と理解がなければできないことであり、そのことからこの論文は貴重なものであるといえる。

韓国の風俗習慣については、在日韓国人の間で、一般に世代差があり、1世から3世になるにつれ、その継承は薄れているといえるが、伝統的な風俗習慣の比較では、「祭祀（チェサ）」については、むしろ韓国よりも日本（岡山）のほうが簡略化していても、祭祀を維持しようという意識が高いという興味ある結果も明らかになった。他に、「七五三の祝い」や「鯉のぼり」のように日本の伝統文化を受容する場合がみられたし、葬礼に際して、「棺に入れるもの」のなかには、韓国の伝統にはなかった杖とか笠をいれる習慣があることが明らかになった。これは日本文化との融合を示す一例といえる。いずれにしても、ここでは韓国との比較を通して、いくつかの興味ある実態を明らかにしたことは意味深いものである。

そしてこれまでの生活実態と民族意識の調査分析から、在日韓国人の民族的アイデンティティを「伝統志向」「帰化志向」「両属志向」「個人志向」の四つのタイプに分類し、整理している。そして、それらの民族的アイデンティティの形成に意味あるものとして、「祭礼」「歴史」「言葉」「名前」などをエスニック・シンボルとして析出し、検討している。

現在の在日韓国・朝鮮人を考察する場合、民族的アイデンティティのタイポロジーとそれに関連するエスニック・シンボルの検討は、基本的で重要な手がかりとなるが、本調査によってもそのことが追究されている。

これらのことから、本論文は在日韓国人の生活習慣と民族意識について、アンケート調査をもとに、韓国との比較を含めて実態を明らかにし、それらを民族的アイデンティティの観点から整理検討した意義ある優れた論文であるといえよう。

ただし、本論文については以下のような問題点の指摘もあった。

まず、本論文はアンケート調査を中心としているが、その分析にあたってはもっと文献調査を活用すべきである。

統計分析の方法については、クロス集計以外にも、因子分析を用いる方法が採用されてもよかったのではないか。

分析項目では、世代の他に居住地域、および居住形態、民族教育、韓国語の修得程度などの項目の観点からの分析も考えられる、などの指摘があった。

さらに、用語の使い方、表現の厳密性、さらに誤植など、日本語表現の問題について、各審査委員からいくつか誤りが指摘された。

これら指摘された問題点の多くは、在日韓国・朝鮮人問題の研究にとって、いずれも貴重な指摘であるが、新たな研究課題ともいえるものもあり、これから研究を進めていく過程で、さらに検討を深めていくことが望ましい。しかしながら、これらの問題は直接本論文の評価を否定するものではないと思われる。

審査委員会以上により、本論文を博士の学位論文として認定することにつき、全員一致で合意した。